

感染症定期報告感染症別文献一覧表(再生医療等製品2024/4/1～2024/9/30)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	コレラ	Wkly Epidemiol Rec. 98(2023)431-452	<p>【概要】2022年に7度目のコレラのパンデミックが到来し、WHOに報告された世界のコレラ症例数(472,697例)は2021年(223,370例)と比較して2倍となった。44カ国がコレラの症例を報告し、2021年の35カ国から増加した。アウトブレイクの地理学的パターンも変化し、2022年には長年コレラの報告がなかった国(レバノン及びシリア・アラブ共和国を含む)が大規模なアウトブレイクを報告した。2大陸の7カ国(アフガニスタン、カメルーン、コンゴ民主共和国、マラウイ、ナイジェリア、ソマリア、シリア・アラブ共和国)で非常に大規模なアウトブレイク(各国で疑い例及び確定例が10,000例)が発生し、これは過去3年間に報告された大規模なアウトブレイクの2倍以上であった。2022年に80カ国がコレラに関するデータをWHOに報告し、うち44カ国が472,697例の症例及び2,349例の死亡を報告した。症例致死率(CFR)はアウトブレイク及び輸入症例いずれも0.5%であった。44カ国のうち30カ国がアウトブレイクを報告し、14カ国は輸入症例のみを報告した。36カ国では2022年にはコレラの発生は報告されなかった。</p> <p>【伝搬及びアウトブレイクのパターン】アフリカ17カ国が2022年にコレラ症例100,437例、死亡1,955例(CFR: 1.9%)を報告し、うち輸入症例は202例であった。中東及びアジア16カ国が2022年にコレラ症例372,205例、死亡394例(CFR: 0.1%)を報告した。このうち56例は輸入症例であり、バーレーン、クウェート、シンガポール及びアラブ首長国連邦の4カ国が輸入症例のみを報告した。ヨーロッパ9カ国が2022年にコレラ症例51例、死亡0例を報告し、うち輸入症例は47例であった。</p> <p>【国際旅行及び貿易】コレラの影響を受ける地域に隣接する国は、国内の疾病監視及び準備を強化し、コレラが国境を越えて蔓延した場合に迅速に検出しアウトブレイクに対応できるようにすることが奨励されている。WHOは、コレラの影響を受けた地域からの旅行者に対して、コレラに対する定期的なスクリーニング、予防接種、検疫を勧めていない。また、コレラの影響を受けた国からの旅行者又はその国に行く旅行者に対して、抗生物質の予防的投与やその投与の証明を勧めていない。</p>
2	細菌感染	Clinical Infection in Practice. 21(2024)100332	<p>最近発表された症例研究で、新種の <i>Variovorax</i> 属 <i>Variovorax durovernensis</i> による初のヒト感染が報告された。この細菌は羊飼いの人工大動脈グラフトから分離され、全ゲノムシーケンスによって同定された。これは、特異な臨床症状を呈する新種の細菌を同定し、その特徴を明らかにする上で、高度な診断技術の価値を強調するものである。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
3	細菌感染	第93回日本感染症学会西日本地方会学術集会第71回日本化学療法学会西日本支部総会(2023/11/9-2023/11/11)後研-2	<p>【症例】20歳代でクローン病と診断され薬剤による治療が開始された59歳女性。約5年前から在宅中心静脈栄養が必要となり、皮下埋め込み型中心静脈アクセスポート(CVポート)が造設された。受診5日前に40℃台の発熱が出現、受診時に右前胸部のCVポート造設部の発赤、腫脹、熱感を認めたため、カテーテル関連血流感染症(CRBSI)が疑われ入院となった。血液培養検体の採取及びCVポート/カテーテルの抜去を行った後、メロペネムの投与を開始した。その後、血液培養及びCVカテーテル先端部の好気培養で同一のブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌が検出され、遺伝子解析により <i>Luteibacter jiangsuensis</i> (<i>L.jiangsuensis</i>) と同定した。入院6日目、メロペネムのMICが&gt;8mg/Lと判明したため、レボフロキサシン(MIC&lt;0.12mg/L)に変更した。その後臨床症状は改善を認め、CVポートを再造設し、入院18日目に自宅退院となった。</p> <p>【考察】<i>L.jiangsuensis</i> は2011年に中国の農業工場の土壌より初めて検出されたが、これまでにヒトへの感染例は報告されていない。<i>Luteibacter</i> 属によるヒトへの感染報告は本症例を除き2例のみ確認でき、1例は免疫不全患者のCRBSI症例であったが、本症例のような薬剤耐性傾向は認めなかった。さらなる微生物学的解析や症例報告の収集が必要である。</p>
4	鳥インフルエンザ	CDC ホームページ <a href="https://www.cdc.gov/media/releases/2024/p-0703-4th-human-case-h5.html">https://www.cdc.gov/media/releases/2024/p-0703-4th-human-case-h5.html</a>	<p>2024年7月3日、CDCはコロラド州にて初めて高病原性鳥インフルエンザ(HPAI) A(H5N1) ウイルス感染のヒト症例が確認されたと発表した。これまでに、テキサス州、ミシガン州において、A(H5N1) ウイルスに感染した乳牛と接触した酪農従事者がHPAI A(H5N1) ウイルスに感染しており、今回の症例も同様に、乳牛がA(H5N1) ウイルス検査で陽性となった酪農場の酪農従事者であった。本症例はCDCが推奨する曝露者に対する監視及び検査戦略を州が実施したことにより確認され、感染した乳牛との接触によりHPAI A(H5N1) ウイルスに感染した症例は計4症例となった。</p> <p>CDCは、特に影響を受けている州においてインフルエンザ監視システムにより注意深く監視を続けており、現時点でインフルエンザ症候群の監視を含め、人々の間で異常なインフルエンザの兆候は見られていない。また、現時点で入手可能な情報に基づくと、4例目の感染は、CDCが米国の一般市民に対する、H5N1型鳥インフルエンザの人体健康リスク評価を低く評価していることに影響はないとされた。</p> <p>感染したトリや他の動物(家畜を含む)に近距離又は長時間、無防備な状態で接触した人、又は感染したトリや他の動物によって汚染された環境に曝露した人は、感染のリスクが高く予防策を講じる必要がある。CDCはこれまでの活動に加え、鳥インフルエンザの予防及び症状が出た場合の対処方法に関する情報を農業従事者に届けるため、影響を受けた地域を対象とした有料のデジタルアウトリーチを開始した。</p> <p>CDCは、HPAI A(H5N1) ウイルスによるヒトへの感染の予防、監視、公衆衛生調査に関する暫定的な勧告を発出し、また、労働者の保護と個人用保護具の使用に関する推奨事項も更新した。これらの推奨事項に従うことは、個人のリスクを軽減し、全体的な公衆衛生リスクを抑制するために重要である。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
5	鳥インフルエンザ	CDC ホームページ. <a href="https://www.cdc.gov/media/releases/2024/s0522-human-case-h5.html">https://www.cdc.gov/media/releases/2024/s0522-human-case-h5.html</a>	<p>2024年5月22日、CDCはミシガン州で高病原性鳥インフルエンザ(HPAI) A (H5N1) ウイルス感染したヒト症例が確認されたと発表した。本症例は、2024年4月1日にCDCが発表した、テキサス州にてHPAI A (H5N1) ウイルスに感染していたと推定される乳牛に接触した酪農従事者が、HPAI A (H5N1) ウイルス検査にて陽性反応を示した症例に続き2例目である。1例目と同様に本症例は、HPAI A (H5N1) ウイルスが乳牛で確認されている酪農場の酪農従事者の感染であり、現在も複数州で発生している乳牛のA (H5N1) 型ウイルス流行に関連している。</p> <p>米国におけるHPAI A (H5N1) ウイルスの初めてのヒト感染は2022年であるが、その感染例は家禽類に直接接触しHPAI A (H5N1) 型ウイルスに感染したと疑われる家禽の駆除業者での報告であり、乳牛との関連はなかったことから、2024年4月1日のテキサス州での報告が世界的に見てもHPAI A (H5N1) ウイルスに感染した乳牛からヒトにHPAI A (H5N1) ウイルスが感染した可能性のある最初の事例と考えられている。</p> <p>感染したウシの生乳中のA (H5N1) ウイルスレベルは高く、このウイルスが乳牛に広く蔓延していることを考えると、同様のヒトの感染例が特定される可能性がある。しかしながら、継続的な感染拡大のない散発的なヒト感染は、CDCが米国の一般市民に対して低いとみなしているH5N1型鳥インフルエンザの人体健康リスク評価に変化をもたらすことはないと考えられた。</p> <p>CDCは、HPAI A (H5N1) ウイルスによるヒトへの感染の予防、監視、公衆衛生調査に関する暫定的な勧告を発出し、また、労働者の保護と個人用保護具の使用に関する推奨事項も更新した。これらの推奨事項に従うことは、個人のリスクを軽減し、全体的な公衆衛生リスクを抑制するために重要である。</p>
6	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20240401.8715735	<p>Texas Department of State Health Servicesは、Texasにおける鳥インフルエンザA (H5N1) ウイルスのヒト症例1例を報告している。本例は、鳥インフルエンザに感染したと推定される乳牛に直接接触したヒトにおける症例であることが確認された。CDCによると、本例は、米国におけるA (H5N1) の2例目のヒト症例であり、ウシへの接触に関連した1例目の症例である。</p>
7	鳥インフルエンザ	WHO ホームページ. <a href="https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2024-DON512">https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2024-DON512</a>	<p>WHOは、United States of America IHR National Focal Pointから、ヒトにおける鳥インフルエンザA (H5N1) ウイルス感染の検査確定例1例について、2024年4月1日に通知を受けた。本患者は3月27日に症状を発症し、インフルエンザA (H5N1) ウイルスに感染していると推定される乳牛への接触歴があった。本例は、感染したウシとの接触によって感染したA (H5N1) の1例目のヒト感染であり、同国で検出されたインフルエンザA (H5N1) の2例目のヒト確定例である。</p> <p>米国において、2022年1月以降、50の州又は準州で野鳥において高病原性鳥インフルエンザ(HPAI) A (H5N1) ウイルスの検出が報告されている。</p> <p>United States Department of Agriculture Animal Plant Health Inspection Serviceからの報告によると、家禽及び裏庭の群れにおける散発的なA-(H5) ウイルスのアウトブレイクが報告されており、酪農施設で哺乳類及び屋外のネコにおいて散発的に検出されていることなどについて記載。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
8	鳥インフルエンザ	WHOホームページ. <a href="https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2024-DON520">https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2024-DON520</a>	<p>2024年5月23日、メキシコのInternational Health Regulations National Focal Pointは、State of Mexicoの住人において検出された、鳥インフルエンザ(H5N2)ウイルスによるヒト感染の確定死亡例1例をPAHO/WHOに報告した。本例は、世界で報告されたインフルエンザA(H5N2)ウイルスによる初めてのヒト検査確定例で、メキシコで報告された初めてのヒトにおける鳥インフルエンザH5ウイルス感染である。</p> <p>2024年3月、本例の居住していたState of Mexicoに隣接するState of Michoacanの家禽農場の裏庭で高病原性鳥インフルエンザA(H5N2)アウトブレイクが検出された。</p> <p>さらに、2024年3月、Texcoco、State of Mexicoの家禽において低病原性鳥インフルエンザ(LPAI) A(H5N2)のアウトブレイクが特定され、2024年4月には二度目のLPAI A(H5N2)アウトブレイクが同州のmunicipality of Temascalapaで発生したことなどについて記載。</p>